

総括コメント

一

本稿は、二〇一四年一月五日、東京大学史料編纂所において行われたシンポジウム「倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会―美術史の立場から2」で、「総括コメント」として報告したものである。

同シンポジウムは、共同利用研究拠点「日本史料の研究資源化」の特定共同研究海外史料領域、および画像史料解析センター「東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析」プロジェクト（以下では、本プロジェクトとする）の研究成果の一端を示すものとして企画された。筆者は、本プロジェクトには参加しておらず、「総括コメント」を述べるにはふさわしいとは思えないが、後述するシンポジウム報告のすべてを幸い大きくすることができた。そのため、研究代表の須田牧子氏からの強いご指名を受け、コメントをまとめた次第である。

以下では、本プロジェクトの位置づけについて、先行研究との関連から言及する。ついで明らかにになった成果や論点を四つに整理し、私見を述べてみたい。

二

本プロジェクトの先行研究について、二点を指摘しておく。

第一に、画像資料における倭寇ないしは倭人像についての田中健夫氏の研究である。

関 周 一

既に須田牧子氏「後述の須田①」が紹介したように、原色複製版『倭寇図巻』解説（近藤出版社、一九七四年）において、田中健夫氏は『倭寇図巻』について「という文章をよせ、歴史学の立場から、その特徴を論じ、明末における倭寇や日本に対する明人の関心の高まりを指摘した。そして画面展開の構成を（1）倭寇船団の出現、（2）倭寇の上陸、（3）形勢の観望、（4）掠奪・放火、（5）退避する明人、（6）倭寇と明官兵との接戦、（7）勝報、（8）明官兵の出撃の八つに分けている。

この文章の背景には、田中氏の一連の倭寇に関する研究がある。¹そして田中氏が一貫して関心を持っていたテーマが、国際認識・対外認識である。特に明代中国人の日本人像については、松下見林『異称日本伝』（元禄元年（一六八八）木版本）や、『不求人全編』（序 万曆三十七年（一六〇九）、『学府全編』（万曆三十五年（一六〇七）刊行）、『万宝全書』（崇禎元年（一六二八）以後）、南波松太郎氏蔵『万金不求人』（万曆三二年（一六〇四）刊行）という類書にみられる日本人像を長年にわたり検討した。そして明代の日本人像には、①円頂・長袖の図、②頭髪を剃り、大刀を肩にかつぎ、半裸ではだしの姿、③『倭寇図巻』の倭寇像である尻からげ、頭頂を剃り、はだしの三系列があり、①は日本から勘合船で入明した僧侶の姿、②倭寇像とした。明代に、日本人や倭寇像がこのように固定化・画一化し、そして①②系列の図は、松下見林『異称日本伝』によって日本に紹介されている。交流の変化にもかかわらず、いったん固定化・画一化された国際認識は、容易に変化することはなかったのだ

ある。⁽²⁾

本プロジェクトは、こうした田中氏の倭寇やその画像についての研究や国際認識の研究を継承するものである。『抗倭図巻』をはじめとする新たに確認された画像を対象に、こうした分野研究の発展が期待される。

第二に、近年の中世対外関係史研究との関連についてである。

最近、桜井英治氏は、「中世史への招待」(『岩波講座日本歴史』第六巻 中世Ⅰ、岩波書店、二〇一三年、所収)において、近年の対外関係史研究の動向を次のように総括している。

テーマのはやりすたりがあるなかで、ここ四半世紀一貫して隆盛を保ってきた対外関係史の分野においても、その関心が微妙にシフトしてきていることが観察されよう。外交の枠組ではとらえきれない、さまざまな人びとの地域をまたぐ活動や交流をすくいあげてきた九〇年代の対外関係史が、社会的文脈をよく残していたのにたいし、二一世紀になって、それまで提出されてきた多彩なモノグラフを整理・総合する段階に入ったところから、おりしも国家史に向かいはじめていた中世史学界全体の動きと共振をはじめたのである。

ただし誤解を避けるためにいうと、私はそのような動向を批判しているわけではかならずしもない。それはある意味で、対外関係史が当然歩むべき道であったと思うし、何よりも日本列島の歴史を世界史にたいしていったん開いてみせた意義は大きい。このプロセスを経たことにより「国内史」自体が鍛えられ、従来の一国史には回収されない力をもったからである⁽⁵⁾。その成果は本講座の各論文においても大いに活かされるであろう。

対外関係史以外では、室町幕府研究の深化が顕著であり、近年はさらに対外関係史とも合流して新たな展開をみせつつある⁽⁶⁾。

〔同論文、八頁。傍線は関による。〕

そして左のような注が付されている。

(5) 対外関係史というカテゴリー自体、国境が厳として存在する現代の産物である。したがって、今日でこそ対外関係史のトピックとして扱われるが、国境を相対化してしまえば、その実きわめてローカルな事件もある。たとえば日朝関係史の少なからぬ部分は、対馬史、すなわち日本の他の地域における地域史・地方史に相当しよう。ここには地域史―日本史―日朝関係史という同心円的展開はなく、しばしば地域史と日朝関係史が直結し、日本史が疎外される。

(6) 橋本雄『中華幻想―唐物と外交の室町時代史』勉誠出版、二〇一一年、など。〔同論文、二五頁〕

傍線で示した二つの研究動向について、桜井氏は具体的な研究を明示していないが、前者の一九九〇年代の研究(引用文の 部)は、村井章介氏の研究に代表されよう。村井『アジアのなかの中世日本』(校倉書房、一九八八年)の「あとがき」では、「国家そのものの実体把握よりも、国家のわくを超える契機、あるいは国家を外から条件づけている諸要因のほうに関心がある」(同書、四一三頁)というようにその関心の所在が明記されている。村井氏は、朝鮮・中国史料に「倭人」と表記される人々、すなわち倭寇や三浦の人々を分析し、「境界人」という概念を提起している。⁽³⁾ 筆者の研究も、村井氏の研究に学びつつ、それを批判的に継承したものである。⁽⁴⁾ 後者の二〇〇〇年代の研究―国家または公権力の側からの研究は、現在四〇代以下の若手研究者たちによって主に担われ、橋本雄氏や須田牧子氏が代表的な論者である。⁽⁵⁾ 二一世紀に入り、後者の研究論文が急増し、「外交の枠組ではとらえきれない、さまざまな人びとの地域をまたぐ活動や交流」についての研究は少なくなってきた。

本プロジェクトの研究は、前者の一九九〇年代以来の研究の流れに属

する。画像に描かれた倭寇などの分析自体が、一六世紀のアジア海域に生きた人々やその交流を知る手がかりになるであろうし、画像の分析や美術史との協業という研究方法や、国際認識という研究テーマは、「社会史的文脈を残した」研究といえるだろう。

三

では、これまでのシンポジウムの成果と論点をあげておこう。これまでのシンポジウムの報告は、左記の通りである。また行論の便宜上、各報告は、「須田①」「朱①」などのかたちで示す。尚、報告題目は、研究紀要のものである。

第一回「比較研究：「抗倭図巻」と「倭寇図巻」」(二〇一〇年一月一日二

日)

須田牧子「『倭寇図巻』再考」〔須田①〕

朱 敏「『明人抗倭図巻』を解説する―「倭寇図巻」との関連をかねて」〔朱①〕

陳 履生「功績の記録と事実の記録：明人「抗倭図巻」研究」〔陳①〕
(以上、『東京大学史料編纂所研究紀要』第二号、二〇一二年三月)

第二回「倭寇と倭寇図巻をめぐる国際研究集会」(二〇一一年一月一八

日)

須田牧子「『蔣洲咨文』について」〔須田②〕

鹿毛敏夫「『抗倭図巻』『倭寇図巻』と大内義長・大友義鎮」〔鹿毛〕

陳 履生「『太平抗倭図』の芸術上の特徴」〔陳②〕

第三回「倭寇と倭寇図巻をめぐる国際研究集会Ⅱ 倭寇図巻と抗倭図巻
をめぐる新視角―美術史の立場から」(二〇一一年二月一日)

馬 雅貞「戦勲と宦蹟―明代の戦争図像と官員の視覚文化―」〔馬〕

山崎 岳「張鑑」文徵明畫平倭圖記」の基礎的考証および訳注―中国

国家博物館所蔵『抗倭図巻』に見る胡宗憲と徐海?」〔山崎①〕

(以上、『東京大学史料編纂所研究紀要』第二三号、二〇一三年三月)

第四回「倭寇と倭寇図巻をめぐる国際研究集会」(二〇一三年四月二日)

須田牧子「『倭寇図巻』研究の現状と課題―趣旨説明にかえて」〔須田③〕

山崎 岳「乍浦・沈荘の役」再考―『抗倭図巻』の虚実にせまる」〔山崎②〕

崎②〕

朱 敏「『平番得勝図』考略」〔朱②〕

陳 履生「『標題』から『平番得勝図巻』を読む」〔陳③〕

(以上、『東京大学史料編纂所研究紀要』第二四号、二〇一四年三月)

第五回「倭寇と倭寇図巻をめぐる研究集会―美術史の立場から2」(二〇一

四年一月一日)

須田牧子「特定共同研究倭寇プロジェクト、三年間の成果」〔須田④〕

板倉聖哲「蘇州片と倭寇図巻と抗倭図巻」〔板倉〕

関 周一「総括コメント」

(以上、『東京大学史料編纂所研究紀要』第二五号、二〇一五年三月。 本号)

右の諸論考から、成果と論点を四点に分けて述べていこう。個々の論点については論者により見解の相違があり、また研究集会を経るにしたがって結論が変化している。以下は、各報告・論文を読んだ上での、あくまでも筆者の視点から整理したものである。

第一に、中国において、後期倭寇に関する絵画資料が複数確認され、その情報が中国と日本との間で共有されたことである。この点は、須田牧子氏の論考「須田①③」に詳しいが、簡潔に触れておこう。

従来、日本において、後期倭寇に関する絵画資料は、東京大学史料編纂所蔵の『倭寇図巻』のみが唯一知られていた。前述した田中健夫氏の

研究も、これに拠っていた。ところが近年、北京市の中国国家博物館に『抗倭図巻』が所蔵されていることが日本でも知られるようになり、いわば新しい絵画資料が「発見」された。こうして、東京大学史料編纂所と中国国家博物館との共同研究が開始されたわけだが、その後も、『太平抗倭図』〔陳②〕や『胡梅林平倭図巻』〔馬〕のような倭寇を描いた絵画資料が存在することがわかり、『倭寇図巻』のみで論じられてきた研究状況とは完全に一変した。

第二に、『倭寇図巻』と『抗倭図巻』の成立過程と、両者の関係が論じられたことである。

本プロジェクトの大きな成果としては、両者を赤外線撮影することにより、これまで肉眼で判読できなかった二つの年号表記が明らかにされたことがあげられる〔以下、須田①〕。

『倭寇図巻』では、冒頭の倭寇船団が出現するシーンで、倭寇船にはためく旗が「弘治四年」と判読できた。この弘治は日本の年号であり、弘治四年は、西暦一五五八年にあたる。『抗倭図巻』では、倭寇船にはためく中央の旗に「日本弘治三年」とある。ここでは、弘治は日本年号であることを明記している。

この二つの年次には、どのような出来事が起きたのだろうか。明では嘉靖年間にあたり、嘉靖三十六年が日本の弘治三年にあたる。当該期には、嘉靖の大倭寇の主役であった王直が明に捕縛され、斬首されている。簡単な年表をあげれば、次の通りである。

嘉靖三十六年＝弘治三年

王直が日本から戻り捕縛された年

嘉靖三十七年＝弘治四年／永祿元年（二月二十八日改元）

王直は按察司の獄に下される。

王直と同行してきた大友義鎮の使者徳陽・善妙らが、明軍と

戦って逃亡した。

嘉靖三十八年＝永祿二年

王直、斬首される。

右の経緯を踏まえれば、須田牧子氏が指摘しているように、弘治三年と四年は、「嘉靖大倭寇鎮庄の象徴的な年」という評価ができる〔須田①、一九八頁〕。これに関する史料が、東京大学史料編纂所に所蔵されている「蔣洲咨文」であり、大明副使として豊後大友氏のもとに派遣された蔣洲が、対馬宗氏に対して倭寇の禁庄を求めている〔須田②〕。

一方、「明人抗倭図巻」（『抗倭図巻』）については、朱敏氏は、「同時代に作成された、写実的な絵画」であり、王江涇の戦いを忠実に記録したものであるとしている。そして『倭寇図巻』との関係については、『倭寇図巻』は明末あるいは清初の人が「明人抗倭図巻」（『抗倭図巻』）を臨模したものであり、明代における戦いが勝利を収めた後の、海防の増強に関する、作者の認識を表している〔朱①〕。

それに対して、陳履生氏は、『抗倭図巻』の美術作品としての完成度の高さに注目する。そして明代から現れた、皇室によく使われる表現を用いて、連続的な表現によって歴史的事件の全容を表そうとしたものであり、雄大な叙事詩のような皇室的な気概が漂うと評価している〔陳①〕。そして、左のように述べる。

「抗倭図巻」は豊富な内容と複雑な構造を抱えながら、最初から最後まで上手にまとめ、パラグラフ間の間隔も見えないものにし、渾然一体の感を作り上げた。〔陳①、二二七頁〕

第二回目のシンポジウムでは、鹿毛敏夫氏が、『抗倭図巻』『倭寇図巻』の成立と大友・大内船や倭寇との関係に着目した。鹿毛氏は、次のように述べている。

統一権力をもたない地域分権の時代とも言える日本の戦国時代に

において、その地域公権を担った各戦国大名のなかでも、大友義鎮や大内義長のように環シナ海域の一角（九州や中国地方）に領国を有し、大船を建造する技術と財力を持ち、さらに直轄水軍を軸に領国沿岸の海上勢力を組織しうる政治力と軍事力を保持した人物は、明政府からは、倭寇組織のうちの日本側構成員を統轄・制御しうる最上級首領と見なされていたに違いない。

〔鹿毛、三〇〇頁〕

そして明側が、大友船を「巨舟」として記している史料（『明実録』）をとりあげる。この「巨舟」は、物理的に大きな構造舟であり、王直らと連携して密貿易を行おうとする巨大倭寇船団をイメージさせたものとした。

そして、旗に「弘治」年号が使用されたことには、次のように説明している。

「弘治」年間の日本から中国沿海部に渡航して倭寇的密貿易や略奪を行った倭寇船を作画モチーフとしたからに他ならない。

『抗倭図巻』『倭寇図巻』の両絵巻は、こうした日本「弘治」年間の一連の倭寇を撃退し、いわゆる嘉靖の大倭寇を終息させた戦功の記録として描かれたものである。〔鹿毛、三〇一頁。傍線部は関による。〕

須田氏が提起した倭寇にとつての日本弘治年間の意味は、鹿毛氏の提示した大友・大内船の考察によつて、その理解はいっそう深まったといえる。右で引用した鹿毛氏の主張が、本プロジェクトの現段階における結論と位置づけられよう。

鹿毛氏が明らかにした大友・大内船は、大内義隆の滅亡後に派遣された遣明船である。だが明側は、遣明船としての条件を整えていない日本国王使船は、倭寇として扱っていた。したがって大友・大内船を、明側が倭寇と認識した可能性はあるだろう。大友船を「巨舟」と表現したこ

とは、明側に与えた衝撃の大きさを窺わせる。

だが鹿毛氏の結論には、根本的な疑問がある。それは、『明実録』にみえる大友船の「巨舟」と、『倭寇図巻』『抗倭図巻』に描かれた倭船・倭寇とはその姿がまったく異なることである。第三点として後述する明代の「戦勲図」という系譜から考えると、王直を拿捕した挿話や、大友氏の「巨舟」そのものを描くのではなからうか。だが『倭寇図巻』『抗倭図巻』をどんなに熟覧しても、そこからは王直や大友・大内船の姿を見出すことはできない。

さらに第四点として後述するような、倭寇の実態が中国人を主体とする密貿易者であることと、「弘治」年号という日本年号とのズレをどのように説明したらよいのであろうか。さらに明代中国人が、日本年号の「弘治」をどの程度まで認識していたのかという疑問が残る。

第三に、美術史からの研究が急速に進展し、歴史学と成果を共有できることになったことである。

例えば、構成、プロット、人物、建物についての芸術的な表現手法や、民間的な「輿地図」に基づいて特定した時間・空間様式を表現しようとしたことなどが、本プロジェクトにより明らかにされた。

その中でも、馬雅貞氏によつて、戦勲図というコンテキストが明らかにされ、その中で『倭寇図巻』・『抗倭図巻』が位置づけられたことの意味は大きい「板倉」。すなわち戦争図像の系譜が明らかになり、『倭寇図巻』『抗倭図巻』は「戦勲」として位置づけられるとの指摘がなされたのである。

馬氏によれば、明代の戦争絵画は戦勲図と位置づけられ、個人の事績を中心に、特定の官吏の功績をめぐって制作されたものである。そして個人の官吏としての経歴を描いた宦蹟図というジャンルにおいても戦争図像をみることができることを指摘し、戦殊図の発展は宦蹟図と共に考

察する必要があると述べる。そして戦勲図は、倭寇を平定した功労者を
 絵画化したものとし、江南の文人に題詩を依頼したことを明らかにして
 いる。

そして馬氏は、張鑑「文徵明畫平倭圖記」に注目し、その人物描写は、
 『抗倭図巻』の内容と一致するという。馬氏は、『倭寇図巻』と『抗倭
 図巻』は、胡宗憲の倭寇平定に取材した蘇州片であると結論づける「以
 上、馬」。

だが、素朴な疑問として、『倭寇図巻』に記載されている人物は、特
 定の人物を表現したものといえるのだろうか。同図には、特定の人物を
 示すような表現がみられないではなからうか。

『抗倭図巻』については、それと史実との関係については、山崎岳氏
 が否定的な見解を述べている。山崎氏は、『抗倭図巻』と、中国側研究
 者が指摘する乍浦・沈荘の役という史実との間には明確な関連性に乏し
 いと結論づけている。例えば、張鑑とする人物の比定には、決定的な根
 拠はないとする。そして山崎氏は、画像を描くにあたり、絵師が的確な
 情報を入手し、描いているかという疑問を呈している。その例として、
 『抗倭図巻』における仏郎機砲の描写の不正確さをあげている「以上、
 山崎②」。

史実と図像との関係や、図像相互の関係を論じたものが、朱敏氏の論
 考である。『平番得勝図』（『平番得勝図巻』）は、標題から地域や民族を
 示し、『明実録』から平番褒賞記録を抽出し、「平番図」関係者の官職昇
 降を示している。そこから、この図は、階州における番族騒擾の平定、
 麻山関・洮州の番族騒擾の平定を示したものとした。その背景に、西北
 地方に対する政治、軍事、民族政策、とりわけ土司制度が反映されてい
 るとした「朱②」。

また陳履生氏は、「標題」から『平番紀事』との関連性を指摘する。『平

番紀事」と同じ目的・同じ主要な賞賛する対象であり、異なる手法をと
 ることで相互に補完しているものとする。そして絵師は、『平番紀事』
 を参照した上で、注文者の別の要求に応じて新たなアレンジを加え、絵
 画のルールに合致した構想や画面のセッティングをした（可能性）を指
 摘している「陳③」。

一方、日本の美術史研究の側からは、板倉聖哲氏が、「蘇州片」とい
 う用語を一つのジャンルとして定式化した。そして板倉氏が実見したい
 くつかの『清明上河図』について、その分析対象となる諸要素を明らか
 にする。そして『倭寇図巻』と『抗倭図巻』の関係について、樹木や波
 の表現などから、「主題に関わる部分では多くの共通点が指摘されてい
 るが、周縁部分、ノイズでは全く異なる位相を示していたことになる」
 と評価している。さらに文徵明に仮託された「平倭図巻」について考察
 し、文徵明が蘇州において倭寇を見た可能性を指摘している「板倉」。

板倉氏の論考は、美術史研究の側からの、本プロジェクトの総括とい
 えるもので、その内容に立ち入るだけの用意はないが、歴史学の側から
 いえば、倭寇などに関する画像資料をどのような基準でみるべきかとい
 うことが明確に示されており、今後の共同研究を進展させる上での礎が
 築かれたといえるだろう。

第四に、後期倭寇の実態について、新たな視点が提示されたことであ
 る。

日本史分野における後期倭寇の研究は、前述した田中健夫氏の研究が
 到達点だといえる。田中氏の研究を踏まえた荒野泰典「日本型華夷秩序
 の形成」（朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』
 第一巻、列島内外の交通と国家、岩波書店、一九八七年、所収）は、一
 六世紀半ばから一七世紀後半における海域アジアについて、次のような
 枠組みを示している。当該期、東アジアから東南アジアの通交網に生じ

た諸現象を、荒野氏は「倭寇的状况」と概括する。その主役は、海禁下の中国沿岸における出会貿易(密貿易)を行う倭寇(後期倭寇)である。彼らは国境・民族の枠をこえた人々の連合体であるが、その大部分は華人で、日本人やヨーロッパ人が加わったものであった。さらに、アジアのある地域において、その地域の原住民のほかに多種類の民族が雑居して、多様な交流をくりひろげている状態を「諸民族雑居」と呼んだ。

右でみた荒野氏の後期倭寇についての理解は、田中氏の所説を踏まえたものだが、日本史研究においては、密貿易者としての側面を強調し、村井章介氏のいう境界人の典型例と理解している。韓国では数少ない後期倭寇の研究者である尹誠翊氏は、『明代倭寇の研究』(景仁出版社(ソウル)、二〇〇七年)において、倭寇の掠奪者としての側面にも注目している。

右で述べた近年の通説に対して、山崎岳氏は、江南における中国国内の内戦という側面から倭寇を捉えるという新しい視点を提示している。

山崎氏は、「倭賊」の側に多くの江南の住民が付きしたがっていることにも注目している。そして、次のように述べている。

なお、「一般に「倭寇」とは海賊の一種だと説明されることが多いようだが、航行中の船を襲って積み荷を奪うといった典型的な海賊行為は「倭寇」の本領ではない。和船も含めて、「倭寇」側が乗用した中小の船隻は、海戦においては福建や広東の大型船に歯が立たず、明朝官軍の敵ではなかった。「倭賊」とりわけその精鋭部隊であった日本人の集団が現地の官軍を圧倒しえたのはむしろ陸上においてであった。繰り返しになるが、「倭寇」が明朝中央で大問題としてとりあげられたのは、いわゆる海賊行為のゆえではない。肥沃な農業地帯であり、先進的な手工業生産地であり、また騒人墨客の集う文芸の中心地でもあった江南地方を、半ば独立状態に置くかのよう

に、「倭賊」集団が占拠したがためであった。こうした形勢を放置しておけば、第二の首都であり明朝の南方支配の中核である南京が脅かされ、さらに南方から漕運を通じて運ばれる富に多くを依存していた明朝政権にとって、その存立の危機にもつながりかねなかったのである。

「山崎①、三五〇頁。傍線は関による。」
日本史研究者にはなかった視点から論じたもので興味深いが、次のような疑問がある。

王直をはじめとする倭寇の頭目が中国人であることを踏まえつつ、前述したように、後期倭寇の主力を中国人(華人)とみることが日本史分野の基本的な理解である。傍線部の理解は、それとは明らかに見解の異なるものであり、それとの相違について明確に説明していただきたい。特に「倭賊」の精鋭部隊を「日本人の集団」とするのはどのような根拠があるのだろうか。

さらに、右に引用した文章の直前には、次のような指摘がある。

この時代の南九州の武力に恃んだ海外進出への気運は、半世紀後の琉球侵攻の前提となったもので、「倭寇」の「倭寇」たる所以であつたともいえる。

ここでいう「南九州の武力に恃んだ海外進出への気運」とは具体的に何を指すのだろうか。とりわけ南九州の武力とは何だろうか。大友氏や島津氏ら戦国大名たちのことなのだろうか。その「南九州の武力」が、「倭寇」の精鋭部隊が「日本人の集団」となるように読める。

さらに「半世紀後の琉球侵攻」とは島津家久によるものだが、それは一六〇九年のことで、山崎氏自身が指摘しているように、嘉靖の大倭寇の時期とは半世紀ほどの開きがある。その間には、島津氏の三州争乱の克服、島津氏と大友氏の合戦(島津氏の勝利)や豊臣秀吉による九州征服などが起きている。「この時代の南九州の武力に恃んだ海外進出への

「氣運」と琉球侵攻との関係は、丁寧な論証する必要があるのではなからうか。

〔注〕

- (1) 田中健夫『倭寇と勘合貿易』（至文堂、一九六一年。増補版、一九六六年。田中健夫著・村井章介編『増補 倭寇と勘合貿易』筑摩書房〔ちくま学芸文庫〕、二〇一二年）、『倭寇』（教育社〔教育社新書〕、一九八二年。講談社〔講談社学術文庫〕、二〇一二年）、『倭寇と東アジア通交圏』（朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』第一卷 列島内外の交通と国家、岩波書店、一九八七年、所収。後、田中『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館、一九九七年に収録）など。
- (2) 田中健夫「倭寇図雑考―明代中国人の日本人像―」（『東洋大学文学部紀要』第四一集、一九八八年）、「倭寇図追考―清代中国人の日本人像―」（『東洋大学文学部紀要』第四六集、一九九三年）、「倭寇図補考―仁井田陞氏旧蔵書について―」（『東洋大学文学部紀要』第四七集、一九九四年）。右の三論文は、田中『東アジア通交圏と国際認識』（前掲）に収録された。
- (3) 村井章介『中世倭人伝』（岩波書店〔岩波新書〕、一九九三年）、『日本中世境界史論』（岩波書店、二〇一三年）
- (4) 関周一『中世日朝海域史の研究』（吉川弘文館、二〇〇二年）、『対馬と倭寇』（高志書院〔高志書院選書〕、二〇一二年）
- (5) 橋本雄『中世日本の国際関係』（吉川弘文館、二〇〇五年）・『中華幻想―唐物と外交の室町時代史』（勉誠出版、二〇一一年）、須田牧子『中世日朝関係と大内氏』（東京大学出版会、二〇一一年）など。

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」（課題番号23242033、研究代表者保谷徹）および画像史料解析センター「東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析プロジェクト」（研究代表者須田牧子）の一環として、その経費の一部も使用して行なった。